

# 乙 頁

第150号 通巻26 第5号

2007年1月15日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

Tel・Fax 077-585-4397

〒 524-0212

守山市服部町2250番地

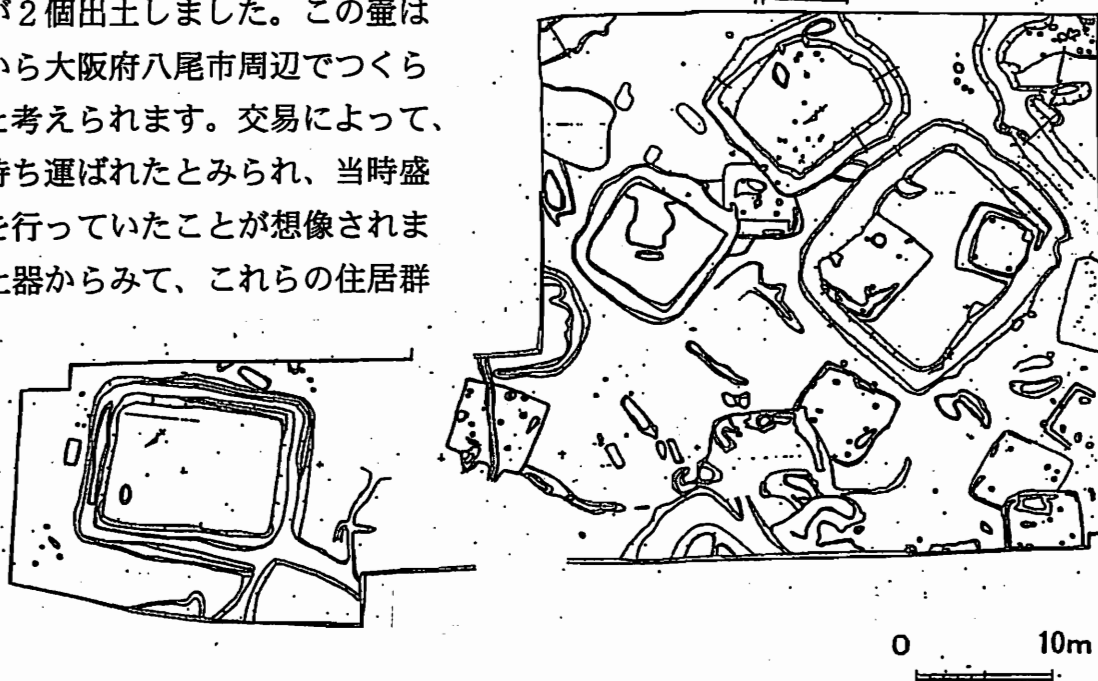
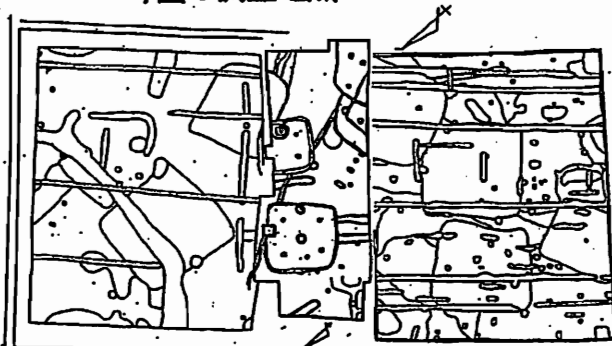
## 発掘調査だより

### 1. 伊勢遺跡 104・105 次調査

伊勢町字大苗代の水田地で、分譲住宅地造成工事及び個人住宅建築に先立つ発掘調査を10月下旬から12月末まで実施しました。調査地点は伊勢遺跡の北東端にあたり、これまでの調査によって弥生時代後期の五角形住居を含む集落跡や古墳時代初頭から前期の方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼなどが見つかっている地域です。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居たてあなじゅうきょ10棟、古墳時代前期の方形周溝墓1基、鎌倉時代の掘立柱建物ほったてばしらたてもの1棟などが検出されました。(次項に全体図)

竪穴住居(SH-1~10)は一辺4~7.5mの大きさで、伊勢遺跡では中・小規模の住居跡です。いずれも平面の形が方形であると考えられますが、SH-1及びSH-10は五角形住居の可能性ががあります。SH-3は一辺が4m程の小型の住居ですが、床面から弥生時代後期の大型広口壺ひろくちつぼが2個出土しました。この壺は土の特徴から大阪府八尾市周辺でつくられた土器と考えられます。交易によって、遠くから持ち運ばれたとみられ、当時盛んに交易を行っていたことが想像されます。出土土器からみて、これらの住居群

今回の調査地点

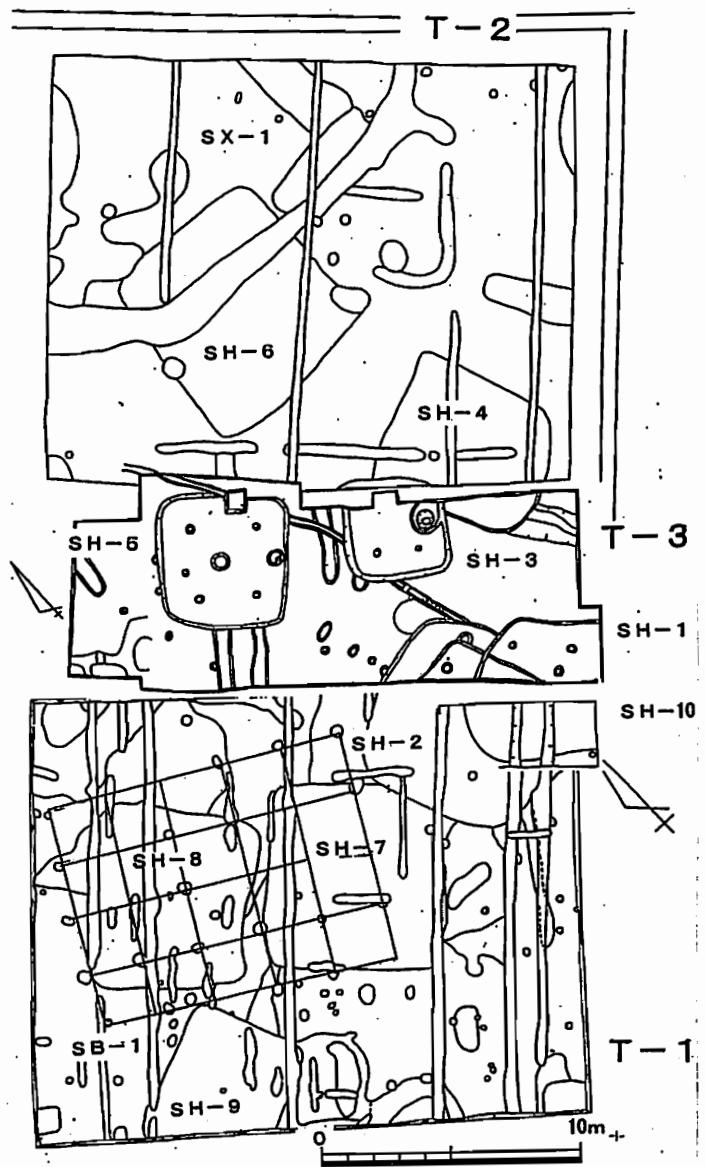


▲伊勢遺跡大苗代地区遺構全体図

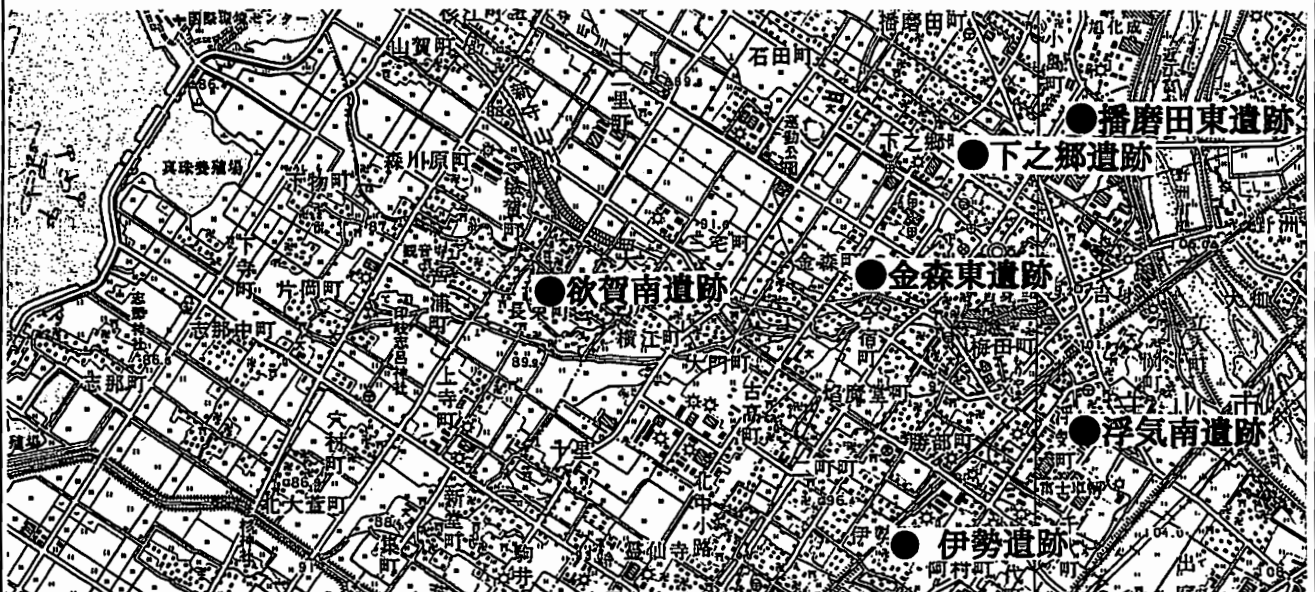
は伊勢遺跡中心部に大型建物がつくられた時代と同時期のものであり、政治や祭祀まいしを行う空間と一般の人々の居住地が分かれていたことがうかがわれます。

この他、古墳時代前期の方形周溝墓(SX-1)は一辺15mと推定され、古墳時代にはこの地域は墓域ほいきとして利用されたことがわかります。また、鎌倉時代の掘立柱建物(SB-1)は4間×5間(8.5m×11.5m)規模の建物とみられ、この地点まで鎌倉時代の集落跡が広がっていることがわかりました。

伊勢町の日吉神社の北側に、東西方向に流れる旧河道きゅうかどが見つかっていますが、これより南側では弥生時代後期の大型建物集中して造営されていて、北側では同時代の竪穴住居が密集してつくられている様子が復元されます。大型建物の造営に携わった人々がこれらの竪穴住居に住んでいたことが想像されます。(伴野)



▲伊勢遺跡 104・105 次調査遺構全体図



▲発掘調査位置図

## 2. 播磨田東遺跡 14 次調査

播磨田町字北横内にて、宅地造成工事に伴い擁壁部分<sup>ようへき</sup>を対象に発掘調査を行いました。調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居を5棟以上検出しました。SH-1、SH-4、SH-5～7が竪穴住居と確認できたもので、SH-4とSH-7は一辺5mの大きさです。このうち、SH-7は焼けた木材と炭が多量に出土したことから、焼失住居<sup>しょうしつじゆうきょ</sup>(火災に遭い、廃棄された住居)ではないかと考えられます。また、住居の周壁部分<sup>しゅうへき</sup>には焼けた木杭が何本も刺さった状態で見つかり、その外側に薄い板の痕跡も確認しました。住居の構造を考えるうえで、興味深い資料といえます。

この他、SH-2、SH-3、SH-8は堆積した土の断面観察から竪穴住居の可能性のあるものです。SH-2とピット(小さい穴)、SH-8からは弥生時代中期後半の土器が出土している他、SH-2とSH-7(8)から拳大<sup>こぶしだい</sup>のサヌカイト石核<sup>せつかく</sup>(縄文時代～弥生時代中期にかけて使用された石器の材料)が出土しています。

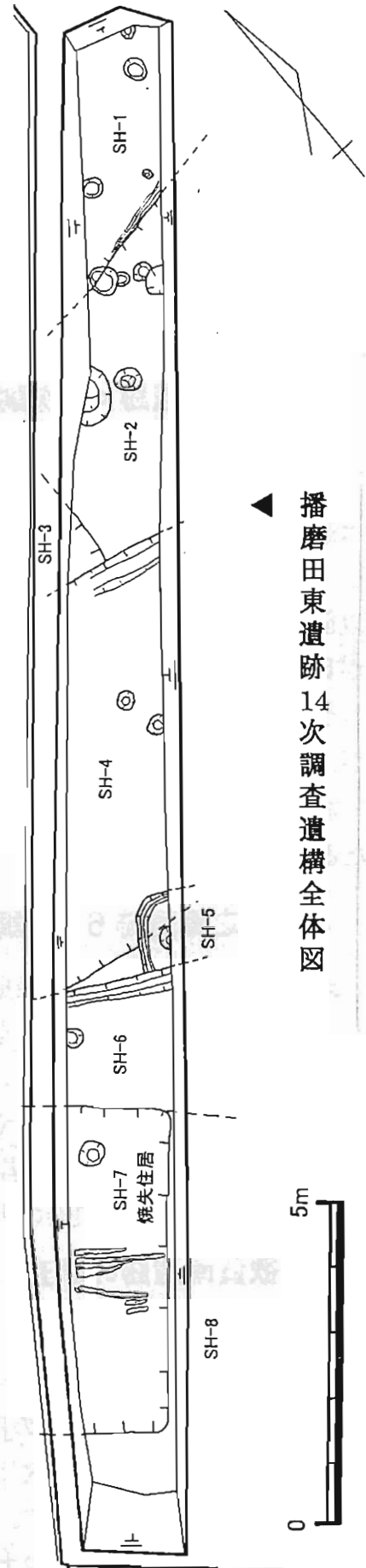
調査地の北側では、昭和54年に行われた1次調査で弥

生時代中期の竪穴住居4棟と古墳時代の竪穴住居55棟が検出されています。今回の調査によって、さらに集落跡が南側に広がることを確認されました。

(森山)



▲播磨田東遺跡焼失住居 (SH-7) 写真



▲ 播磨田東遺跡 14 次調査遺構全体図

### 3. 浮気南遺跡4次調査

浮気町地先の水田地にて、宅地造成工事に伴う発掘調査を実施しました。調査の結果、古墳時代後期の旧河道と溝を検出しました。旧河道は幅12m以上、深さ1mの規模で、川底の炭が混ざっている場所から須恵器の杯と山桃の種が出土しました。溝は幅2m、深さ1mの規模で、旧河道につながる水路の可能性がります。今回の調査地点の200m北側には古墳時代後期の集落遺跡である吉身南遺跡があり、その関係が注目されます。

(森山)

## 調査中

### 4. 金森東遺跡44次調査

守山高校グラウンドの南側で、宅地造成工事に伴い調査を行っています。調査地は削平を受けており、遺構の残存状況はよくありませんが、隣接する道路部分を以前調査した際に確認された、溝の続きが見つかりました。溝からは細片の土器しか出土しておらず、年代は不確定ですが、ほぼ東西・南北方向に直線的に伸びており、土地を区画するような溝であったと考えられます。

(大岡)



▲金森東遺跡溝写真

### 5. 下之郷遺跡61次調査

史跡下之郷遺跡の整備前発掘調査は前号で一部紹介しましたが、現在もさらに調査区を広げ環濠部分の断ち割り調査などを進めています。前号では環濠が5条検出されていると報告しておりましたが、新しい調査区でさらに1条の環濠(6条)が見つっています。環濠は深さ2m近くあるものや、浅くて途切れているもの、植物遺体が多量に含まれるもの、環濠の内部に杭を打ち護岸をしているもの、何度も掘り直しているものなど種類も多様です。今後の調査で環濠の実態を明らかにしていきたいと思ひます。

(川畑)

### 6. 欲賀南遺跡の調査

区画整理事業に伴う調査は、欲賀町集落の南側に位置する字大蔵にて実施しています。これまでのところ、古墳跡や平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落跡などを検出しています。古墳は直径約20mの円墳とみられ、墳丘が高さ1m程残存していました。墳丘上からは弥生時代中期の竪穴住居が検出されており、残存している墳丘が地山を削って造られていることがわかります。墳丘のまわりに掘られた周濠は幅6~7m、深さ1.5m程あり、底近くから古墳時代の土師器片が少量出土しました。

(小島)